

鬼と化した母の愛に救われて

作家 西村滋（365人の仕事の教科書）

僕は幼少期に両親を結核で亡くしているんですが、まず母が6歳の時に亡くなりました。物心がついた時から、なぜか僕を邪険にして邪険にして、嫌なお母さんだったんですよ。散々いじめ抜かれて、憎まざるを得ないような母親でした。

これは後で知ったことですが、母は僕に菌をうつしちゃいけない、そばへ寄せつけちゃいけない、という思いでいたようです。本当は入院しなきゃいけない身なんですが、そうなれば面会にも来させられないだろう。そこで母は、どうせ自分は死ぬのだから、せめてこの家のどこかに置いてほしいと父に頼み込み、離れを建ててもらったそうです。

僕はそこに母がいることを知っているものですから、喜んで会いに行く。するとありったけの罵声（ばせい）を浴びせられ、物を投げつけられる。本当に悲しい思いをして、だんだんと母を憎むようになりました。母としては非常に辛い思いをしたんだと思いますよ。

それと、家には家政婦がいてね。僕が幼稚園から帰ってくると、なぜか裏庭に連れていかれて歌を歌わされるんです。「きょうはどんな歌を習ってきたの？」と聞かれ、いくつか歌っていると「もっと大きな声で歌いなさい」なんてうるさく言うから嫌になったんですがね。これも母が僕の歌を聞きながら、成長していく様子を毎日楽しみにしていたのだと後になって知りました。

僕はそんなことを知る由もありませんから、母と死に別れた時もちっとも悲しくないわけね。

でも母はわざとそうしていた。病気をうつさないためだけじゃない。幼い子が母親に死なれて泣くのは、優しく愛された記憶があるからだ。憎らしい母なら死んでも悲しまないだろう。また、父も若かったため、新しい母親が来るはずだと考えたんでしょうね。継母（ままはは）に愛されるためには、実の母親のことなど憎ませておいたほうがいい、と。それを聞かされた時は非常にびっくりしましたね。

孤児院（こじいん）を転々としながら非行を繰り返し、愛知の少年院に入っていた13歳の時でした。ある時、家政婦だったお婆さんが、僕がグレたという噂を聞いて駆けつけてくれたんです。母からは20歳になるまではと口止めされていたそうですが、そのお婆さんも胃がんを患い、生きているうちに本当のことを伝えておきたいと、この話をしてくれたんですね。

僕はこの13歳の時にようやく立ち直った、と言っていいかな。ああ、俺は母に愛されていた子なんだ、そういう形で愛されていたんだということが分かって、とめどなく涙が溢（あふ）れてきました。

